

さきに愛ありて

第二部 - 結婚の中 -

さきに愛ありて

第二部　—結婚の中—

藤原 審 爾

新潮社版

さきに愛ありて

第二部 結婚の中

昭和四十八年十二月十日 印刷
昭和四十八年十二月十五日 発行

定価 六五〇円

著者 藤原審爾 ふじ かわら しんじ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(三)三〇一・二二
振替東京八〇八番

(乱丁・落丁のものは、本社またはお買
上げの書店にてお取替えいたします)

目次

あらたな生活

五

生活の深みへ

四五

日々のたたかい

六

心よどむ

一六

こころ歩む

一七

若い冬

二五

装
幀
田
渊
俊
夫

さきに愛ありて

第二部 結婚の中

あらたな生活

志摩の新しい病院の一階には、看護婦のための部屋が三つ、裏側にならんでいる。

一つは、婦長のための部屋で、あとの二つは、部屋の両側にベッドがたたまるようになった、二人用の部屋である。

四月の半ばをすぎると、婦長の部屋へ、吉祥寺から井田が移ってきた。あとの二つの部屋にも、清子のほかに三人の看護婦が二十日すぎにそろった。

井田が、志摩に、

「万城さんを、先生、なんと呼ばいいんですか。万城さんとよびにくいですよ。奥さまとよぶのも、まだおかしいでしょ」

と相談し、結局、万城さんとこれまでどおりによぶことになった。

霧子を入れて、六人の看護婦が出来、内科と外科の医師もきまった。

霧子は、こんなふうにな大袈裟にして、患者が来なかったら、大変だ。どうなることかと心配していたが、問題はなかった。四月三十日に、どっと入院患者がやってきた。

大学の病院から移ってきた患者もいれば、新しい医師たちが連れてきた患者もいるし、志摩の

仲間がおくってくれた患者もいるというふうだった。

男の患者はほとんど胆石、胆嚢炎で、女の患者は二人とも甲状腺障害だった。

それで霧子は、

やっぱり、男だなあ

と志摩を見直した。志摩はあまり経営のことを口にしないたちなので、坊っちゃん事業の病院ではないかと、霧子はなんとなく案じていたのだが、それほど志摩はのんきな男ではなく、商才にむしろたけているみたいだった。

これまで霧子は、病院は患者のとりあいをするものだばかり、いつの間にか思うようになっていたのだが、実際はそうではなかった。

五月一日に開業すると、十人あまりの患者が、それぞれ志摩の友人の医師の紹介状をもって、診察をうけにやってきた。

志摩病院は、順調にすべりだしたといってよかった。

新たに病院にやとわれた看護婦たちは、むろんそれぞれ経験をもっていたが、志摩の流儀をのみこむまでには、かなりの時が必要だった。

やっとみんなが仕事に馴れ、スムーズに仕事を自分でやれるようになったのは、二カ月近く経ってからだった。

それと前後して、うっとうしい梅雨がはじまった。

志摩は、六時すぎに起き、七時までには食事をすませ、七時半頃、吉祥寺の家から車で新しい

病院まで送ってもらう。

午後の来診の患者を五時まで診察して、それからやっとのんびりした時間を迎える。六時すぎになると、夜勤の若い医師がやってきてくれ、それで志摩は仕事から解放されるのである。

志摩は最初もつと別な様子を想像して、少なからず期待をもっていた。六時になれば、夜勤の医師がくるので、自分は暇になる。あとは霧子と一緒に、夕飯をたべにいたり、映画をみたり、時には彼女の部屋で話しこんだりする。そういう生活をすぐに手に入れることが出来ると思っていたのだが、そんな機会はめったになかった。思ったより入院患者がふえ、二階三階の詰所に二人の看護婦がとられるし、三交替制なものだから、霧子のほうが手をはなせないのだった。

むろん霧子はその気になって、志摩と一緒に出かければ、それはそれでなんとかなるのだったが、霧子は、そういう気儘が出来ないたちなのである。それに霧子は、孝三郎から秋までに結婚をするようにすすめられているのに、どうしてもはつきりその気になれないのだった。ずいぶん長い間、夢みていた志摩との愛の生活が、いつでも手に入れることが出来るようになったのに、なにかためらう気持ちがあつて、すっきりすることが出来なかった。

志摩はその朝いつものように六時すぎに目を覚めた。毎日、おそくとも九時すぎには戻り、湯に入つてすぐ眠るくせがついているので、志摩は寝起きがよい。

女中の梅子の給仕で、あたたかい朝食を、汗をかきながらたべていると、母の貞乃がめずらしく早起きして、食堂へ姿をゆっくりあらわした。

窓の外の裏庭では、今日もしと雨が降りつづいている。

朝の挨拶を梅子と志摩から受けたあと、貞乃は、

「ずいぶん降るわね」

と志摩のむかいに腰かけて、窓の外へ顔をむけた。

こんなに早く起きたしてきたのは、なにか用事があるからである。

「ねえ、仁さん」

「なんですか」

「お父様は、お彼岸をすぎたら、すぐ式をなさりたいらしいですよ」

「そうですか」

「そうですかじゃありませんよ」

「そうですか」

「しようなない人ね。結婚するまでには、いろいろしなければならいことがあるのですよ。お仲人さんに、先方へもいつていただかなくてはね。わたくしもうかがわなければならいんですよ」

「そうじゃちこばったことをしなくたっていいですよ。仲人は奥村先生がしてやると言ってくれていますしね」

「でも、大浜さんにお願ひしてはどうかしら？」

奥村は外科部長で、大浜は学長である。

「あまりけばばしくやりたくないんですよ」

「でもね、大浜さんを頼んで、ハクをつけたほうが、霧子さんのためにもいいと思いますよ」

「そうですかねえ」

霧子のためといわれると、志摩の気持ちはすぐゆらいでくる。

「それに北村の奥さんだって、あなたの仲人だけはやりたいと始終おっしゃってるんですよ。奥

村先生じゃ、ひっこみがつかないですからね」

「そうか。そういうことも、考えなきゃならないんだな」

「そればかりじゃありませんよ。結納をはやく届けてあげないといけませんよ。二十日や一ト月で支度は出来ないんですよ。霧子さんもいそがしいでしょ」

「ええ」

「それから、お部屋のことも考えてあげないとね」

「いいですよ。二階全部つかうから」

「あなただけならいいですよ。でもね、志摩家としては、外聞もありますからね。ほんとうは霧子さんのために、お家を建ててあげたいのよ。そのくらの礼はつくさないといけないんですよ。うちでわたくし達が、霧子さんを本当に大事なお嫁さんとして遇していることを、世間にみせてあげれば、霧子さんだってうんとらくなんですよ。でもね。わたしは、うちの家風や流儀に、はやく霧子さんが馴染めるためには、やはり二階で一階に暮したほうがいいと思うですよ」

「ええ」

「ですからね、少し造作もして、綺麗にして、住み心地をよくしてあげたいと思うのよ」

「ほかア、今のままでいい気がするけれどね」

「歩けばミシミシ音がするですよ。あなたが寝返りしても、階下の賀子は目を覚すんですよ」

志摩はあわてて目をそらした。幽かに頬があからんだ。

「二カ月はかかると棟梁がいつてましたからね。もうそろそろ造作にかからないといけないんですよ」

「そうですね」

「ともかく先方へはやく挨拶にいかないとね。その日を、霧子さんと今日は相談してください」
「はい」

「それから今度の日曜日に、霧子さんにきていただきたいのよ。お父様や賀子にひきあわせておかないとね」

「今度の日曜日ですか」

「そうですよ」

今度の土、日には、鹿島沖へ根魚を釣りに霧子と行く約束だった。

二人きりで釣りに行くということが、言いにくくて、もたもたしているうち、貞乃はすっと立ちあがり、食堂から出ていった。

遠くから父の孝三郎が、

「おーい」

と繰返し貞乃をよんでいた。

月子は白いシャツとオレンジ色のシャツで、長椅子へ仰向けに寝て、新聞の映画案内の欄へ目を通していた。

このところ三日も雨が降りつづき、客の足も少なくなり、気持ち浮き立たない。なにかばあつと気が晴れるようなことをしたいのだが、雨ではどうにもならない。

むろん映画をみる気にもなれなくて、

「あああ」

と月子は新聞を投げだした。

低いテーブルのむこうでは、まきがソファに腰かけて、テレビを凝々とみている。テレビは十五分もののメロドラマをやっている。人をばかにしたようなお涙ちょうだいのよろめきドラマで、まきは、

「くだらないね」

だの、

「こんなことってないよ」

なんて時々文句を言いながら、テレビを眺めている。結構たのしんでいるのである。そのうち、そのテレビがおわると、テレビを消しに立ち、

「どういう気なのかね、霧子は」

とまきが言いだした。

なんでもいいから気をまぎらわせたかった月子は、すぐその話題にくいついた。

「どういう気って、どういうこと？」

「結婚する気なのかねえ」

「そりゃ結婚はしたいのよ。あの先生に惚れてるもんね。霧子ってしぶといからね。きっとあの先生に、ずっとねらいをつけて、それで看護婦さんになったんじゃないかしら。そんな気がするわ」

「それならさっさと結婚すればいいじゃないか」

「あの子は、慎重なのよ。わたしたちのことで、あの先生がいろいろ言われるのが、いやなんだと思うわ」

「そりゃあんたの考えすぎだよ。あんたがお店をやってるってことを、先生は知ってるんだもん。それを承知で結婚しようというんだろ」

「そりゃそうだけど、噂になれば先生だって具合のわるいことがあるでしょ。それを心配して、ためらってるのよ」

「好きなら、結局は、一緒になるんだろ」

「どうかしらね。もしかすると、わたしが店をやめてくれるのを待ってるかもね」

「あの子はそんなことは思わないだろう。ほんとに好きなら、結局は、一緒にならないではいられないよ」

「でもあの子は、きちんと計画を立てて、一步一步進んで行くのよ。急いで結婚する気はないと思うわ。二三年かけて、ちゃんとやって行けるようにお膳立をする気じゃないかな」

「そりゃ無理よ、先生のほうが承知しないよ。男ってほしくなったら、我慢出来ないという弱点があるものなんだよ」

「うん、そうね」

「わたしは、相手が相手だし、嫁入道具といったって、普通の品物じゃ駄目だろうからね、とてもうちじゃ無理だとあきらめてるんじゃないかと心配してるのさ」

「やっぱり、親って、考えるところがちがうわね」

「当り前だよ」

「そういうことになる大変よ」

「そうだろう、どのくらいかかるかねえ。結納に、百万はつつんできてくれるだろうけどね。五十万くらいの貯金はもたせてやらないと、化粧品だって買えないからね。あとどのくらいかかる

かしらね」

「二三年、買わなくてもすむだけの衣裳はもたせてやらないとね。それが大変だと思うのよ。おつきあい、いろんなところへ行かなくちゃならないから、それだけのものでなくちゃならないんだもんね。小姑がいるんだし、あんまり見劣りしちゃう、うるさいわ。道具のほうは、必要ない物であればいいと思うわよ。箆笥と洋服ダンス、机なんてことで、十もあればすむでしょうけどね」

「頭がいたいよ、わたしや。昨日も陽子が電話をかけてきてね、また」

「まだ言ってるの？」

「そうなのよ」

まきが東京から逃げもどつてきて、二三日経ったとき、陽子から金の無心の手紙がとどいた。

どうしてもわけは言えないが、百万円必要なことが出来た。なんとかしてくれという文面だった。前に家を暴力団にとられそうになった時、まきが借金を申し込みにいったら、それこそにべもなく断わられた。やっと麻生に助けてもらい、どうにか家をとられずにすんだのだが、そのときまきはたべものが心痛で喉を通らなくなったほどだった。

そんな目にあわせておいて、ぬけぬけと金を無心するなんて、まったく虫がよすぎて話にならない。まきより月子のほうが腹を立てて、

「冗談じゃないわ、そんな金はないって言ってやるのよ。はつきりかかなきゃ、ききめないわよ」とまきに言いつけた。

苦い目に合わされたのに、まきは、もう熱さを忘れてしまつて、あまりはつきりとした手紙がかけなかった。月子が思ったとおり、すぐに陽子は、威猛高な調子になり、店か家売って、百

万つくれ、それは遺産の分配で当然の権利だというようなことを言ってよこした。

「こんなもの、返事することないわ。姉ちゃん、ちゃんと自分の分だけのものは、結婚するとき、とってゐるんだから」

今度はまきも月子の言うことを聞いて、その返事をださなかった。まだ麻生に借りた金を払っていないし、家は霧子の結婚の時に処分する気だった。もう一つ、もし小さい店でも買えるほど余分が出ればと、まき自身がそれをあてにしていた。

すると今度は、電話で、まきに泣きつきだしたのだった。

公一が店の金を、五十万ほど費い込んで、バーの女につきこんだ。それで陽子が文句を言いに行くと、あべこべに手切れ金五十万よこせといわれたそうだった。

一昨年、公一は集金を三十万ちかく、無断で集めて費いこみ、それですっかり信用をうしなひ、妹に養子をし、養子の謹治がいまでは店をまかされている。

またまた今度こんな費い込みがばれたら、とても無事にはすむまい。勘当されるようなことにもなれば、とても三人の子供を抱えてやって行けないというのである。

月子は、どうしたものかと案じているまきへ、

「いまだしてやれば、またやるわよ」

「そうだろうね」

「勘当にでもなつて、うんとこりさせなきや駄目よ」

と言ひ、自分で陽子に電話をかけ、がんがんにやりまくつた。それでも陽子は、また電話をかけてきて、

「母さん、助けてよう」